

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

歴史的分野専門委員長 各務原市立中央中学校 本間 祐一

1 はじめに

来年度的美濃地区大会に向け、歴史的分野では歴史学習において、未知の状況にも対応し、社会を構想していく力を身に付けさせることをねらい、「価値に関する認識を形成する授業」に力点を置き、研究を行ってきた。特に下記のSTEP2や3において、既習等を活用しながら、歴史的事象に対して背景をつかんだ上でその是非や優先順位を考える、「展開後段の問い」について実践を行ってきた。

2 R7 歴史的分野の研究の方向 (重点)

(2) 社会の形成に参画する力を育てるための指導方法の明確化

- ② 価値に関する認識を形成する授業のモデルの構想・提案
→ 授業後半における、価値に関する認識を表出させる教師の発問の在り方

	授業の種類	位置
事実に関する認識を獲得する授業 価値に関する認識を形成する授業	STEP1 ○ 学習する時代の国作りの課題や社会の変化から単元の課題を作る授業 ○ 時代の出来事や社会の仕組みについての知識を獲得する授業	単元導入 ～ 中盤
	STEP2 ○ 人物の国作り等に対する営みについて、概念的知識を獲得する授業 ○ 時代相をつかみ、時代を象徴する事象の是非について判断する授業	単元 中盤
	STEP3 ○ 時代の転換点はどこか考え、「よりよい国にするために何が最も大切だったのか(事象の優先順位や序列)」を判断する授業	単元 中盤 ～ 単元 終末

3 授業実践

授業実践1 大垣市立江並中学校(11/26)

授業者：安田 和司 教諭

単元名：「明治時代～北海道の歴史を解釈する～(第2学年)」

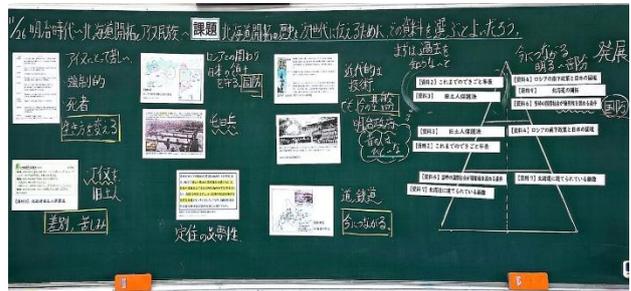
【価値に関する認識を形成する授業(STEP3)】

課題：「北海道開拓の歴史を次世代に伝えていくのに、どの資料を提示することが重要か」

内容：既習の北海道開拓に関わる事実をもとに、自分が適切だと考える資料を順位付けし、ピラミッドチャートに位置付ける。仲間との対話を通してさらに吟味し、順位付けをした根拠を明確にする。

観 点：①仲間との対話を位置付けたことは、自分のピラミッドチャートを見直し、資料の内容を「発展の歴史」と「アイヌの歴史」の2つに集約する姿につながったか。

②展開後段で「私たちの語りが次世代の歴史認識に影響するならば、どちら(国の発展の歴史 or アイヌの歴史)を伝えていくとよいか」と問うたことは、生徒が自分の考えをもち、判断基準を表出する姿につながったか。



【授業実践1について】

研究内容(2)②「価値に関する認識を形成する授業」

「明治維新」の学習を深化させる意図で仕組んだ単元である。深い教材研究の下、歴史を学ぶ意義を大切にしつつ、価値の認識の形成につながる授業となった。

観点①：仲間との対話から、資料の内容を集約する

○今回扱った北海道の開拓による影響を上記のような2点に集約したことによって、生徒たちが政府側なのか、またはアイヌ側なのかといった立場を明確にすることができた。

▲課題設定(前時)の段階で、課題解決の必然性がやや弱かったため、自分の考えを深めるために仲間からの意見を求めたり、取り入れたりする姿につながらない生徒もみられた。

→課題設定の段階で、目的意識をもたせる必要がある。今回のような「どの資料を提示することが重要か」という、相手の立場に立つことが必要な課題設定も求められる。単元導入、あるいは単元の歩みの中で、話し合う目的を意識させていくことを大切にする。

観点②展開後段の「問い」によって、生徒が価値を認識する

○(安田先生は生徒の学習状況をつかんだ上で、指導案上の「国の発展の歴史とアイヌの歴史」のどちらを伝えていくとよいか」という問いは行わなかったが)「国の発展の歴史」と「アイヌの歴史」に分類されるという展開を描いたことで、明治の国づくりの課題に関わる時代背景を捉えることにつながった。それにより生徒たちが「ロシアからの国防」「現在につながる交通の整



備「アイヌの文化の否定」など、自分の判断基準をもとに話すことにつながった。

- 「私は、必要な（やむを得ない）犠牲と必要でない犠牲があったと思った。ロシアの南下に対して北海道を開拓することは必要な犠牲と言えるけど、(中略)アイヌの人々を「強制」したということにすごく引っかかって・・・。先にアイヌの人たちと議論をすれば、アイヌの人々にとっても・・・」という意見があった。この生徒の姿は、人権は何よりも重視すべきだという価値に関する認識を形成する姿であった。

▲資料の順位付けをする際、生徒は自分なりの根拠を話していたが、順位の根拠というより最も重要だと思う資料の理由を話していた。1番目と2番目の違いを問い直すことで、生徒の資料選択の判断基準がよりいっそう表出されるのではないかと。

授業実践2 瑞浪市立瑞浪南中学校(12/23)

授業者：掛布 啓太 教諭

単元名：「モンゴル帝国と蒙古襲来」(第1学年)

【事実に関する認識を獲得する授業(STEP1)】

課題：「なぜ北条時宗は元の要求を断ったのだろう」

内容：北条時宗が元の要求を断った理由を追究することを通して、日本の独立と幕府の体制維持のためであることをつかむとともに、それを優先した時宗の判断について自分の考えをもつ。

観点：◎全体交流で概念的知識を獲得した後、「負ける可能性があったのに、どういう気持ちで拒否したのだろう」と問うたことは、北条時宗の立場に立ち、時代相をつかむ姿につながったか。



研究内容(2)①「事実に関する認識を獲得する授業」

元寇による、鎌倉幕府の対応とその意味を追究する学習である。当時の国内外の情勢をもとに、概念的知識を獲得させていく授業となった。

観点①：概念的知識を獲得した後の問いから、時代相をつかませる

- 全体交流後、「国内外の体制や関係の維持」と集約し、時宗が拒否したことについて考えさせた。モンゴル帝国による東アジアへの領土拡大への憂いがあり、国内の御恩と奉公による武士政権の体制が確立していた時代だったととらえることができた。



▲上記の点を、どの生徒もがとらえることができるよう、全体交流後に丁寧に押さえる必要がある。場合によっては板書で集約した過程を確認したり、ノートに記述させたりする時間が必要である。

▲展開後段の問いが、課題と類似しているものになり、生徒によっては課題と似たような追究になってしまった。

4 今後の方向

(1) 2つの授業実践からの考察

◇「事実に関する認識を獲得する授業」において、問いは、概念的知識に関するものにすることで、明確に時代相をつかむことにつながるのではないかと。

◇特に「価値に関する認識を形成する授業」においては、考えたり話し合ったりする必然をもたせることが必要である。

◇歴史的分野において、実践1で扱った北海道の「開拓」のように大きな変革に関わる事象を扱う際には、その影響として光と影が存在する。展開後段の問いでは、「国の維持・発展」と「権利の尊重」に集約することで、汎用性のある問いにできると考える。

(2) 来年度のスタートで確認すること

- 1 「事実に関する認識を獲得する授業」も後半の問いを大切に。STEP2や3の学習との関わり考え、展開後段の問いは、概念的知識を踏まえた発問を行う。
- 2 STEP2や3の展開後段で「価値に関する認識を表出させる発問」を行う前には、前段でつかんだ概念的知識を確実に共有し、同じ土台で考えられるようにする。
- 3 2の際、歴史的分野の学習においては、「国の維持・発展(為政者の立場)」と「権利の尊重(民衆等被治者の立場)」に大きく分類でき、検討できるものになることが多い。それを念頭に置き、生徒がどのような価値を表出するか描いておく。
- 4 問いの中身は、時代背景をつかんだ上で、当時の社会に見られる課題に関わる問いを行うことが前提とする。(公民的分野で、現代社会に見られる課題について構想することを念頭に置く)

STEP2,3の発問の内容としては、展開前段において獲得した概念的知識に関して、「是非を問う」「影響を問う」など考えられるが、いずれも生徒が価値に関する認識を形成する姿が見られた。それらが、どのような場合(STEPの位置、概念的知識の内容等)において効果的であるのかを整理していきたい。

5 終わりに

授業研究委員の先生方や美濃地区の先生方が中心となり、歴史的分野における価値に関する認識を形成する授業の実践が進んでいる。歴史的分野の担当市である関市の指導案をもとに、郡上市で先行実践するなど、準備を進めてくださっている。積み上げてきた今年度の成果を、美濃地区大会で最大限発揮していただけるように、県内の先生方一丸となって支えていきたい。